【都市と美術研究所】2026 年 1 月 27 日 発表要旨

「都市と女性–エドワード・ホッパーが描いたニューヨーク」

Women and Cities: Edward Hopper’s New York

江崎聡子（聖学院大学准教授）

Satoko Ezaki

Associate Professor, Seigakuin University

エドワード・ホッパー(1882-1967 年)はアメリカ合衆国の都市風景と郊外の自然を描写し、近代アメリカ美術を代表する画家となった。美術史上はしばしば「アメリカン・シーン」派に分類され、リアリズムの手法によって、工業化が進展し、移民国家へと変貌しつつあった近代アメリカを描いたとされる。本発表においては、ホッパーの都市風景に登場する女性たちに焦点をあて、急速に近代化を遂げた 20 世紀初頭の都市、ニューヨークとそこに生きる女性たちをホッパーがどのように描いたのかを考察する。工業化が進んだこの時代のニューヨーク市には、職を求めてアメリカ全土から人が押し寄せ、またアメリカ文化の中心にあった北ヨーロッパ系プロテスタントとは宗教や言語がことなる東欧・南欧からの移民が急増し、ホッパーが慣れ親しんだ 19 世紀的な「古き良きアメリカ」は姿を消しつつあった。こういった時代の様相を踏まえつつ、ジェンダーおよび階級といった視点をとりいれながら、ホッパーの絵画にあらわれる労働する女たち、消費する女たち、そして娯楽を享受する女たちに焦点をあて、ホッパーの女性像の特質を分析する。そしてその際に、レジナルド・マーシュ、トーマス・ハート・ベントン、フローリン・ステットハイマーといった同時代の他の画家の作品とそこに表現された女性像と比較しながら、ステレオタイプな女性像とホッパーの描いた女たちのイメージの相違点を考察する。さらには、そういった女性表象の分析を通じて、ホッパーが近代アメリカの都市空間や同時代のアメリカの社会や文化をどのように理解し、解釈し、作品に表現していったのかを議論する。

プロフィール：

江崎　聡子　えざき・さとこ

聖学院大学人文学部欧米文化学科准教授。専門分野はアメリカ美術、アメリカ視覚文化。主な著書に、『描かれる他者、攪乱される自己——アート・表象・アイデンティティ』(共著、ありな書房、2018 年)、『エドワード・ホッパー作品集』(東京美術、2022 年)、『デリシャス・メトロポリス——ウェイン・ティーボーのデザートと都市景観』(創元社、2024 年)、「ジェンダー×イメージ×SDGs——視覚文化にジェンダーの視点を取り入れると何が見えてくるのか」 鈴木詩衣菜編『SDGs で世界を探求する——9 つのテーマから学ぶ』(分担執筆、聖学院大学出版会、2025 年）などがある。